



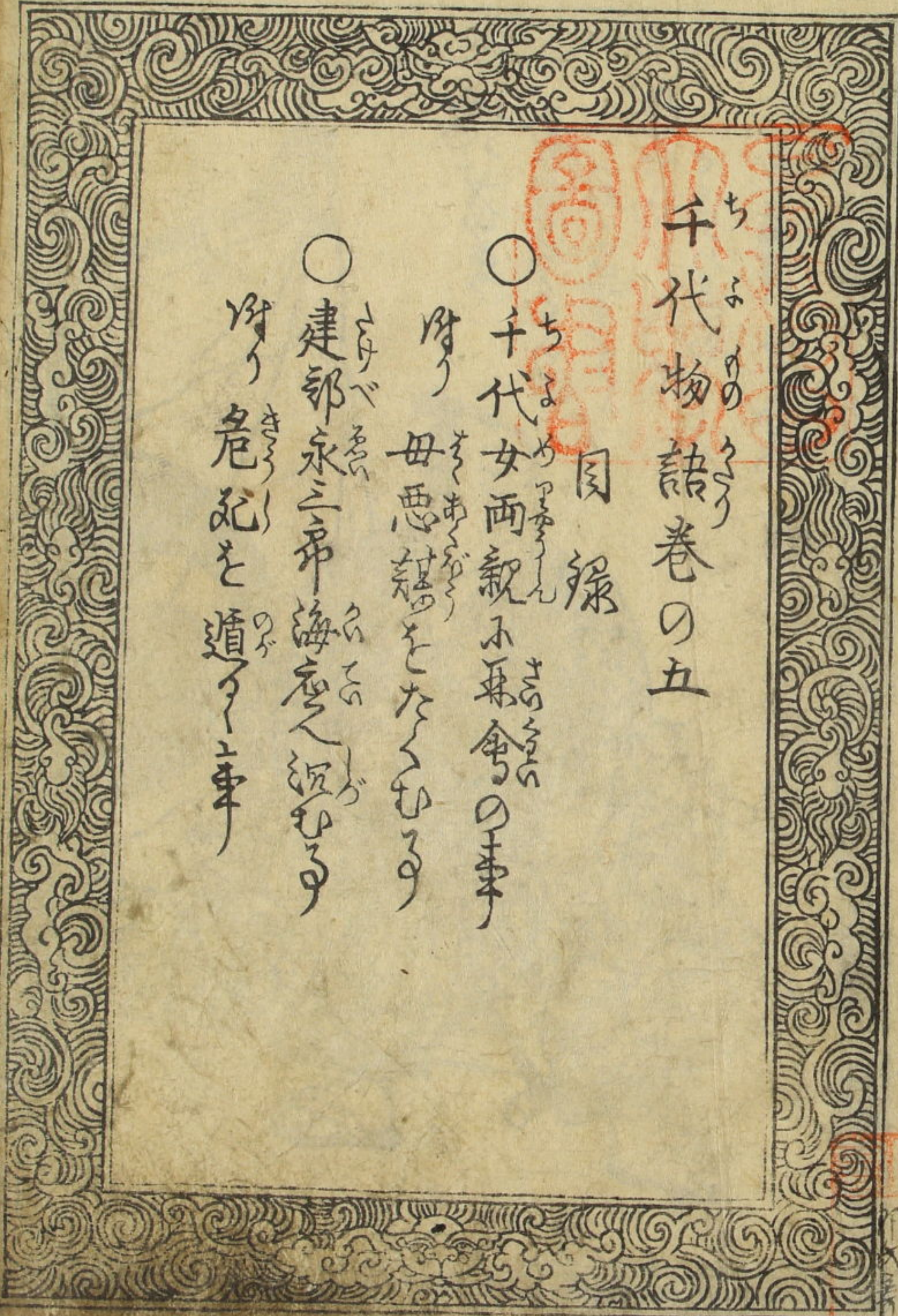
13  
3396  
5 H



13  
3396  
5

和漢御書所  
蔵書  
新津屋大藏

小田嶋



千代物語卷の五

目録

- 千代女西親小再會の事  
母悪謀をたくむる
- 建部永之希海彦入河むる  
危死を遁ぐる事

千代

和漢御書所  
蔵書  
新津屋大藏





山陽 奇談 千代物語卷之五



東都 鼻山人著

九 子代女友親小再命の事

定家卿下品上生の息を誅るお小立取る後の事  
 ちよちよえ壺巻の光りすの上の事  
 伶子平の事  
 定家卿下品上生の息を誅るお小立取る後の事  
 ちよちよえ壺巻の光りすの上の事  
 伶子平の事  
 定家卿下品上生の息を誅るお小立取る後の事  
 ちよちよえ壺巻の光りすの上の事  
 伶子平の事



を子代けしをを先吾をより侍と平が  
尋ねらる期とひいれれば侍と平まぬら  
強きて奉着き心の相違のぬいおあ我け  
いまはしと尋ねるふ子代やういされば  
強さるる意で同くは家中ある挂鬼雷  
者とは扱ふ扱ふ一つづつ絶ふ者ひの  
おはをを区され母も人もいおあ  
まぬる昔も漢代の家人と  
ふ代五十一

おが家人も道めてもほくあり子幸万  
命あがら入再び命らんまのの婿  
縁は支親らん消えで強き心  
かいらぬるありは強き心  
バ今より我くが強き心  
えさせて二人が老のちうらとも  
きひてやういされば  
あては別湯を尋ねる人も  
あひ



なほむべき的あてもあく又國くにを去る時ときもあをい入いれせられ  
ハ族うぢの貴たか宿しゆくりの名な補おぎなひつらせん人ひと不物ぶぶつをすま  
あまされハ捨せん方かたあをく據たかまたある侍さむらい士の教しやく母はは一ひと親おや  
相あひ激げきてとの人ひとの情なさけを去さ今いま日ひまで命いのちを送おくつゆ我わが  
身み形かたち盡つくまりてせとお切きらぶ逆さかつてそのおとが  
疑うたが面おもて入いらうらあまき法ほうともお呼よ向むかへて昔むかし傳つたへる  
をこの時ときもあましつらぶ父母ふぼ入いおのひ懸かるあはるの男おとこの  
くれどの只ただ能よふらひはていぬ徳とくも作つくら平へいが法ほうまへ

くめ六五ノ二

後ご波なの國くにあてえ綾あやき者ものの子こありん立たてがてあふ  
彼かわくくはさかをたりのあれがふ代しろが親おやの増ませあて  
夫おとこハお咄うたきさうらけ者もの必かならず定ま年としの終はつし想おもああらうあて  
おの目めが後ごら小男こなうを捨すてく強たかぶどの許ゆるを逆さかせう  
とそえゆ釜かま川がわぶの家いへの禍わざはひの出で来きるとりのあ大方おほまはたハ  
後ごま死しすまあぶぐ一ひとたあてら女子むすめの身みのいづで據たかた  
の國くにまで独ひとりハ逆さか来きるまは徳とくもくうをたつう那なと  
いふ作つくら平へいやうらあせれゆらせん人ひとの子こあま



まがさくとの者の心さぬも能く我くか老の杖と  
嘆むべしふか能くあらずとの時仕方あざし防剣の  
沙汰もくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
別ふ斗ひやうもあるくくくくくくくくくくくくく  
別くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
来るべし兄弟せんといひくくくくくくくくくくく  
揚り永く希が許く行てとも不相見くくくくくくく  
侍与平まぬ対面くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくく

配偶くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
年性有れが外不力と嘆むべき人もあし又父とも母  
母のひもくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
不舎教くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
あの対面くくくくくくくくくくくくくくくくく  
持せ妻娘とも移ひくくくくくくくくくくくくく  
いづく飲るくくくくくくくくくくくくくくくく  
能く有るくくくくくくくくくくくくくくくくく



若き楫をどの心ゆてゆと増舟を扱ふて漕わぐり  
 大なる目張一ッ切て持来られれば永之希收びて果  
 果被目出を死結しあや目の出るる處を志せり  
 なま係る業不拙あくゆどの果か庖丁して又  
 あらとめて一献めんわらふといふかあまもあま  
 ぶく婿どの庖丁定めて尋たるらじとひんじら  
 して永之希起板を物と料らんとするおら村取  
 通る海来られれば停平えといふ婿どの船不すむ

ののるを厭つむ只言したりのみお送ら風  
 ありたあれがとて婿どのをきりお湯まき是  
 とて所の皮笠をわなれど細さるるればふ代  
 針持を教ずむも付て永之希ふおせり  
 船中書筆りて酒燈の真をらりその夜に悦び  
 明ぬ是より永之希の刀もた細めてお置  
 なるらちあま帆の揚おろし櫓械のきひやう  
 び又ハ陸およして商人の妻を死をむる



云 抑して早瀬くし〜まれば支親も今らん安く〜  
すまき するるおれは儲重なる不又室の津より浦をが津〜  
りるや 日外の後尾上自害して永之希子代法とも其の夜  
より入るざれば是寛めあ人巾倉尾上を報してあが  
去る小穀ひあ〜トさるる國のち〜津く多れば二人うが  
ゆゑを治まあつて他の國をも併うを求めしはれ其  
折節 伴与平兵庫ある商人の爲を争く室の  
津をく抑 治れば永之希 密う不子代一〜  
あ代五 五

はあて我をえ付てあがらある難きやあま〜らん  
ゆふ我い〜あつて人〜あぬ〜  
あ〜押入〜姿を換なればまきひあ〜ま〜  
安うらぬるありあつてふんを付てあ〜と〜永之希  
持高 執りし〜あつてお伏〜人あ〜あ〜子代父  
い〜何率地を争く立退〜へき中〜ふ〜  
母の何とあ〜あ〜と〜密う不伴与平ふ〜  
日外娘が相見〜と〜来〜し男妻ふん〜  
あ代五 五



は程世上の風俗も小塩の侍室の侍あて人を殺  
立退るるが仕美室中あるや一若く不彼若海  
トワて人あも多む能くつればさりと勞つるおる  
ともゆのいさず又娘が先角室の侍近く海の花  
たるゆを獣ゆゆゆす名定は男室の侍を人  
殺しと多るゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
保集る縁ふゆゆゆ科あや折ゆゆゆゆゆゆゆ  
しては男を退出まむぎ保集るをあゆゆとゆゆ

ふ代五十六

侍と平実めと母のひるるがゆゆゆゆゆゆゆ  
後扱あくとゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
さぬあゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
振舞もゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
僻ゆゆあゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
るゆをあゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
立子尋方あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
されがけ子ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ











⑩ 建邦永之帝海庭人沈む事  
 舟り危死を逃ぐる事

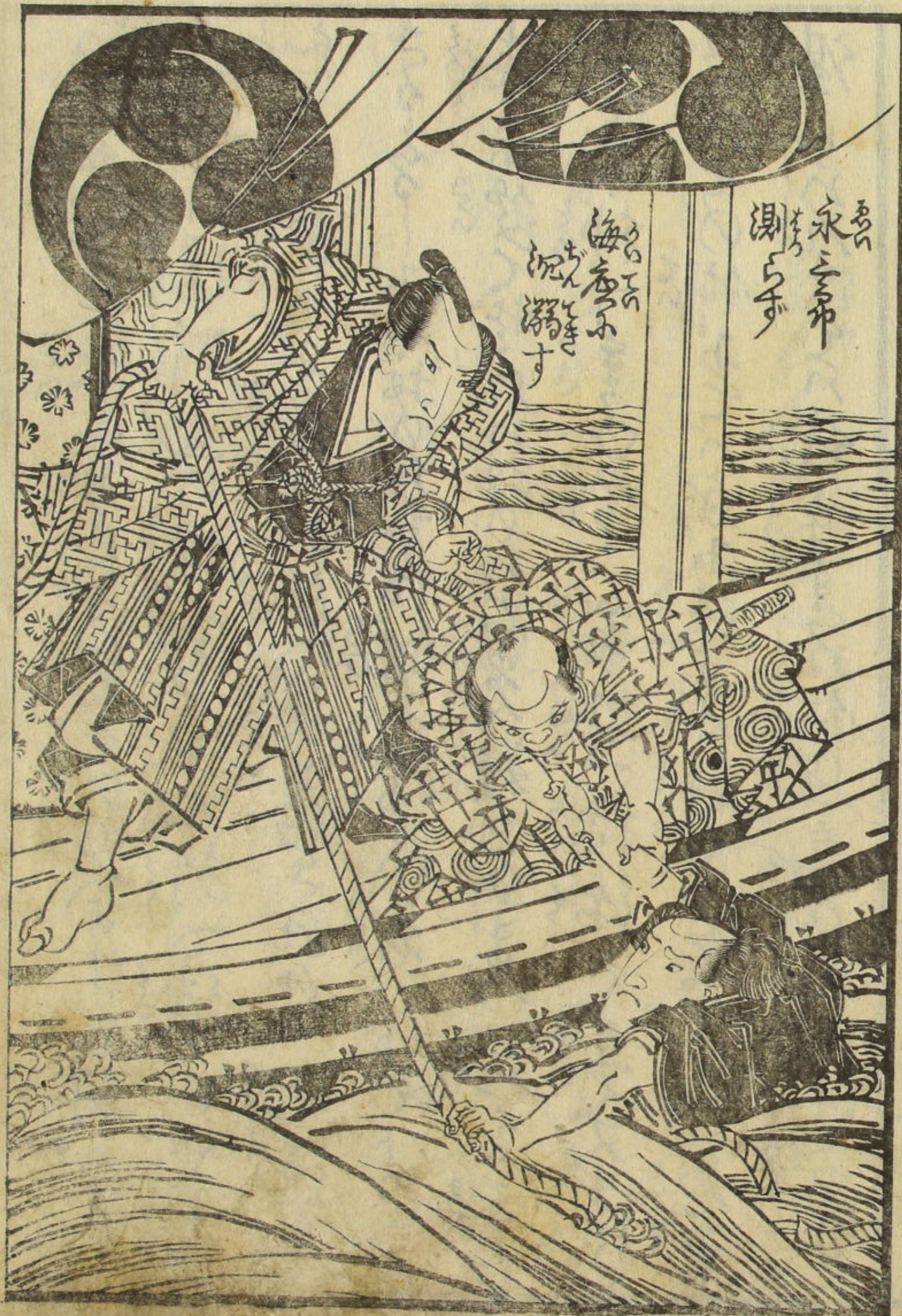
諸説子代ハ係る命てありとハ憂あも志らばけらち  
 何とやらハ狗吠きくもなき小怒るるのミまられば  
 ともは津をたさるるべき方後やあらんと母のハ小怒目  
 ありて侍平ハ高あひの役りあれがき茶和のくらあ  
 後とてとを時方より纒とれて西の方漕い  
 次の夜周防の玉宇加島まで往く改納をさるる

永之帝も今ハ安くとまわいてはきも杖あるね  
 といふて立出舟のりあどを續あるあ侍平まぬハ  
 候り候ふ候ハ幸色をてその疾ハ酒をた出  
 永之帝あも子代あもいしく志あそ酔せあま  
 皆酒を飲せとち伏せうはと死子代を母健  
 るひていののあ不体ませ替はあり侍平と二人  
 又も永之帝酒を志あけつその疾目散ふと父の  
 頃ふるあれが侍平船増へ立出く候も面白の光景









下段の舟のひさしせんめのをと舟ののらち渚ちり  
 ありて一艘の舟あぞり空なる永三郎ら身  
 おのひまを悲しく入舟の者あり助けまじり  
 くれが舟中あてもあまを懸せられ助けよと叫ぶ  
 汝あづる櫓械をたゆとてた付せたる有る船  
 せり揚ぐる永三郎は後坐あたるん此しつり  
 ある船ごとと舟あれば人のあま懸念持て糸  
 の糸孫孫云列八木の城香川た出づ針光糸と



りる者あり 永三郎をこめてそのゆかりを同永三郎  
 著るる 播州邊の浪人あつた九列一泊りし初今夜  
 船にて 盗賊不欺りし海へ突之落されけり天運  
 なるあつたあやめのりし船不運のいふてゆぞとりし  
 光景あつておれりおのぬ笑難るままづ是をそら  
 せんと小袖一まき子帯一箱刀一腰添くま又まじ  
 くるその船あつた不運なる難用もあるほじ免角  
 深ららんまぞり我守する仁保島の城不遠返せ

むめ五十三

らくくと情あるまほし永三郎も妻あつた難き連  
 光景あつた連立藝列しあつた情いふをぞたの  
 る香川の永三郎を尋ねるあつたおのひを  
 能くあつていぬ運なる借又作と平の念あつた永三郎  
 城郭へぬとまじびらの夜の中船出して波落返  
 きたるこれいふ安堵とまぬ難し合とあつた代  
 へ曉るる初紙あつたまをいふとも言ふ入法  
 船もあつた初しおあもあつたはこいふ初











のれ  
浅く  
始末  
の後編  
の巻  
ふら  
じく  
解分  
を  
徳  
を

鼻山人著  
千代物語後編  
全五冊前後  
合本而十卷  
尚丁亥春同時出版賣出のり希後とも  
清覧の上相察らすは詳判の程希希

千代物語卷之五終



五代五十五





